

町史編さん室だより



令和9年度の安平町史発刊にあたり、町史編さん作業の進捗状況などをお知らせします。

問合せ 総務課町史編さん室 ☎ 2511

前回までは、安平村の分村から早来町、追分町の誕生までの経緯をお伝えしました。

今回は、町として歩み出した初期から発展していく、昭和40年代までの早来町の様子から振り返ります。

第十回

初期の早来町の

まじづくり



早来町の誕生

昭和三十二年一月一日、追分町の誕生から三年余り後に「早来町」が誕生。初代町長には村長の磯部義光が就任し、その後昭和三十四年四月から昭和五十年の選挙まで、村長を三期、町長を五期務め、三十二年間にわたり、首長として町の発展を牽引した。

昭和三十五年の国勢調査では、町の人口は七五二〇人（追分町は六九六五人）で、町民の六割以上が農業や製造業などの第一次産業に従事する世帯であり、当時の高齢化率は四・六％、現在の早来地区の三十七％と比較すると、若い世代を中心に活気のある地域だったことがうかがえる。

農業・牧畜業

当時の農業は冷害と凶作に見舞われる厳しい環境下であったが、戦後の農地開墾計画や自作農創設特別措置法により、自らの土地を得た農家たちの懸命な開拓によって農地を広げていった。水稻の作付面積を年々増やす一方、麦類や豆類に代わり、酪農振興のための飼料作物、ビートなどの作物が増えていったのも、町が誕生した頃

で、昭和三十七年頃からはグリーンアスパラの栽培が奨励され、早い時期の農家の収入源となった。

戦後の混乱期に牛馬頭数が大幅に減少した牧畜業は、その後、乳牛の導入が飛躍的に進む畜産業に変わり、昭和二十五年に七一五頭だった乳牛が、昭和四十五年には二五四八頭まで飛躍的な増加を見せている。

また、昭和三十年には国から胆振東部集約酪農地域の指定を受け、早来町は酪農のメッカと言われるまでの基盤が確立された。

商工業

町内の商工業もまた、発展を見せていた。

大正時代から続く遠藤酒造合名会社は、昭和二十七年に富士酒造合名会社となり「ときわ鶴」の醸造販売などを続け、早来と遠浅で操業していたチーズ工場は昭和三十三年に合併し、雪印乳業株式会社として再発足。地域内の豊富な生乳を集めて、昭和三十九年には六種ものチーズを生産していた。

木材産業も盛んで、製材、木製品の工場や輸出入の単板、合板の工場が新設、昭和三十五年頃からは製紙工場の指定チップ工場として次々と新設された。

また、昭和三十六年には早来町商工会が発足するなど、町全体の商業が発展を遂げていた時代であった。

交通・通信

早来駅は当時、厚真や鶴川、日高方面への玄関口として大きな役割を担っており、集められた木材や木炭、馬などが、ここから本州や道内各地に送り出されていた。

陸路においては、早来と厚真を結ぶ馬車鉄道が、昭和二十四年にバス運行へ切り替わり、昭和三十年代に入ると一般家庭にもトラックや乗用車の普及が始まった。

通信手段として、郵便局が明治二十九年に早来地区、同三十七年に安平地区、同四十年に遠浅地区に開局。当時は通常郵便、郵便為替、貯金業務などのほか、電話交換業務や電信業務も担っていたが、昭和四十四年に電報電話局（現在のNTT）が早来に開局し、通信業務の自動化により急速に近代化が進んだ。

行政・財政

町制施行後の昭和三十二年度は、新庁舎建設費などを含め、町の歳出規模は、前年比二割以上増加の約七千万円で、歳入面では普通交付税や特別交付税の交付、昭和三十四年度以降には国有提供施設等所在市町村助成交付金が町内に所在する陸上自衛隊安平弾薬支処、早来燃料支処に適用され、毎年度約五百万円の交付が新たに

教育・文化

加わった。こうして確かな財政基盤を固めた早来町は、昭和四十四年、苫小牧市、白老町、鶴川町、厚真町の一市四町で構成される広域苫小牧圏都市計画区域に指定された。

町内の学校は、昭和二十二年の学制改革で国民学校から小学校となった早来、安平、遠浅、瑞穂、富岡と翌年設置された守田小学校の六校で、中学校は早来、安平、遠浅、瑞穂中学校（小学校併置）の四校。昭和三十八年に町が策定した第二次教育計画により、昭和四十二年に学校給食センターが設置され、小中学校への給食の提供が始まった。

昭和四十七年四月には、早来中学校の新校舎に瑞穂中学校、翌年四月には安平、遠浅中学校が完全統合され、これに伴いスクールバスの運行を開始した。

なお、早来町には旧役場庁舎を利用して開校した早来町立早来文化学院があり、上級学校へ進学できない勤労少年への集合教育のほか、夏季の夜間は事業所や商店などで働く女子青年、冬季は農家の女子青年など、自らの教養を高めようとする町民が通っていた。